

【研究ノート】

## 日本における地域博物館という概念

### The General Idea of a Regional Museum in Japan

布谷 知夫\*  
Tomoo NUNOTANI

#### 1 はじめに

博物館で混乱して使われている用語の一つに、「地域博物館」がある。さまざまな文脈で「地域博物館」が使われているが、実はかなり異なった意味で使われていることが多く、混乱が見られる。先年に、卒業論文を書くことを目的として、琵琶湖博物館の活動を例として、地域博物館の方向性を研究したいという学生が来たことがあるが、この場合の地域博物館とは、博物館のどの部分をとらえて議論しようとしているのか、というところでまず壁に当たってしまったという経験がある。

しかしこの「地域博物館」という用語は、博物館のあるべき姿を考える上では、意味が大きい。近年になって博物館そのものが大きく変化している。だが少なくとも現代の博物館のひとつの課題が、利用者と博物館とのかかわり方を考えることにあることは大方の異論はないところであろう。そして、それを考えるときに、地域博物館をどうとらえるのか、ということと深く関係してくる。利用者と博物館という課題については、全国の各地にある数多くの博物館が、個々に利用者とかかわり方について具体的に考える中で解決されていくはずであり、個別の博物館の運営の考え方は、地域博物館という用語をどのような意味に使用するのか、ということにも象徴的に現れている。

したがって、これまでに地域博物館という用語が

どのように使われてきたのかを振り返りながら、同時にその中で現れてくるいくつかの問題についての議論を行いたい。

#### 2 「地域博物館」についての議論

##### 1) 郷土博物館と地方博物館

もともと、博物館の用語としては地域博物館という使い方はされていなかった。それに対して、郷土博物館、あるいは地方博物館という用語が使われている。最も初期の例として、棚橋源太郎(1934)はその両方の用語を使い、「郷土博物館」は町村単位ぐらいに考え、「地方博物館」は郡とか県単位ぐらいにしている。つまり博物館がかかわる場所の広さを示す用語として使っている。しかしこのようにこの両方の用語の範囲を明記した使い方は、他の研究者からは以後もされていない。

例えばもっとも初期の博物館学の教科書である「博物館学入門」では、岸本喜代治(1956)は「郷土博物館における教育活動」の項目で、「地方博物館は中央博物館と異なり、その地域に密接なる関係において設立され、その郷土的特色を持つところに特徴を持つ」として用語としての区別を明確にはしていない。

また富士川金二(1971)は、博物館の種類区分を「対象とする地域による区分」の項目で、全国博物館、郷土博物館、地方博物館に分けて、郷土博物館

\*琵琶湖博物館

を「郷土の関連のある資料を主とし、郷土的色彩をもつもので」とし、地方博物館を「地方住民の啓発を目的とするもので、資料もまた地方関係のものを主とする地方的色彩を多く持つもの」としている。

いずれにしても、国に対する地方であり、あるいはやや狭いニュアンスとしての郷土であって、それ以上の主張はなかったと思われる。ただ岸本（1956）が「その地方の特徴を十分調査研究することを必要とし、その地方の最も必要とするものは何か、何を要求しているのかという問題を解決せねばならない」としているように、地方の博物館であるからこそ、その地方の特徴のある博物館にするという議論はされている。この立場は後にもたとえば田辺悟（1985）の、同じような性格の博物館が林立する中で個性を失うので、「むしろ進んで地域住民のあらゆる層に受け入れられるような、地域の人々とより深いかわりを持つような内容にしていかなければならないだろう」というような議論にもつながっている。

## 2) 地方博物館という主張

それに対して、地方の博物館であることの明確な主張をする立場での議論を行ったのは、千地万造（1964）である。千地は地方の博物館は一般的な法則からではなく、具体的な地方の自然から取り組み、そのための目的をもった資料の収集や研究が必要であるとした上で、次のように主張している。

ここで大切なことはその活動は必然的に他地域の自然や身近でない自然との関連を持ち、調査・研究分野の拡大、資料の充実に発展し、さらに新しい展示・教育活動と新しい研究のテーマの開発となって、われわれの下にかえてくるということである。いきいきとした展示・市民の興味をひきつけ、市民に強く訴える展示、新しい展示はこうして生まれ、館と市民との結びつきは強まるであろう。

この議論は自然科学系の博物館についての議論とされているが、内容的にはすべての種類の博物館で通用するであろう。地方の自然などを研究することで、資料や展示を充実させて、その地方の市民とむすびつく、という議論は、地方博物館であることの地方での意味づけをしようとしたものである。

また日浦（1968）は地方主義と表現して、「地元

の物や現象を調べたり集めたりすることが、最も効果的で、遠隔の地の誰がやるよりも優秀な研究と充実した資料収集ができる」とした上で、狭い地域の持つ特殊性は日本全体や世界という広い地域の一般性によって眺めるとき、その性格をさらに明確に、深く理解できる、として地方から広がっていく展示や研究のあり方について主張した。地方において、地方の研究や資料収集を行うことの意味とあわせてその優位性を示したものである。

これに対して、郷土あるいは風土という用語を使って、加藤有次（1977）と倉田公裕（1979）は比較的良好な立場での主張を行っている。この議論は、加藤や倉田が委員として参加した秋田県立博物館基本構想を作成する過程での議論が発展したもので、加藤（1977）は

いかなる小都市、いかなる小地域であっても、そこには地域としての特徴があり、それらの郷土地域には、数百年、数千年の長い歴史的風土によって培われた、それぞれの特徴が築かれている。つまり郷土という地域あるいは風土が形成されて、特有な文化が創造されているのであるから、この風土と文化を保存し、未来社会のために活用し、新しい文化を創造し育成しなければならない使命があるのである。この使命は、郷土地域住民の義務であるということができるのである。

と述べている。これらの意見は最近になって注目されている地元学のさきがけとなる議論であり、博物館は地域らしさを生かした文化を創造していく場として位置づけられている。さらに倉田（1979）は「その風土は住民の手で、保ち、育て、創らなければならぬということである」とした上で「地域（県立）博物館は、地域という風土の中に、地域住民の手によって、地域住民のために創られるべきものである」と述べ、博物館と地域住民とのかわりを明確に述べている。

## 3) 地域博物館

地域博物館という用語の「地域」に特別な意味を持たせて始めて使用したのは、平塚市博物館であろう。小島弘義（1976）は、博物館が地域社会の理解と研究に役立つものであることを目指して、目標と

する博物館を1) 総合博物館であること、2) 行政の市町村の地域割りではない、3) 展示および教育普及活動を媒体として、地域住民に何度も利用してもらうような博物館」とし、さらに、浜口・小島(1977)は「地域博物館にとって不可欠な要素に、地理的条件と地域住民の学習権の保障、さらには館側の理念と体制がある」として、地域博物館という用語によって、地域住民と地域社会の中での博物館の占める位置を主張しようとした。

この議論を整理し、理論化したのは、伊藤寿朗(1986)である。博物館を市民の学習の場と位置づけて議論(伊藤、1974)をしてきた伊藤は、竹内順一(1985)の議論を発展させて博物館をその目的とする機能によって「三つの世代」に区分して、その機能における博物館活動のあり方を分析し、教育活動や利用者のかかわり方などについて議論を行い、目指す方向として地域博物館を提起した。さらに伊藤は博物館を、地域志向型博物館、中央志向型博物館、観光志向型博物館という三つに区分し、それぞれの教育内容などを示すとともに、地域博物館の主張として、専門分野ごとの科学的な成果を地域に適用するのではなく、地域課題を軸として地域の新しい価値を発見していくということと、地域の課題を博物館が代行して啓蒙・普及するのではなく、地域に生きる市民自身が主体となって取り組むことができるように支えていくことという二つの主張を示した。そして、地域の資料を中心としているから地域博物館なのではなく、地域の課題に、博物館の機能を通じて、市民とともに応えていこうというのが地域博物館であると結論付けた。そして博物館の課題、資料、調査・研究、教育などにおいての地域博物館のあり方や意味づけなどを行った。

伊藤はサービスエリアとしての地域と地域博物館とは違うとしたうえで、地域の利用者が自分が暮らす地域に向かい合い、市民相互を結びつけるのが地域博物館であるとした。この点は博物館のひとつの機能として議論されたことはあるが、利用者側を主体として議論されたのは初めてであろう。伊藤の議論はその後の論文等(1991, 1993)などでも広く知られており、特に博物館学の議論としてというよりも博物館の現場で、具体的に現在の博物館が目指すべき方向として、大きな影響を与え、伊藤の定義す

る地域博物館および第三世代の博物館は日本の目指すべき博物館像として定着したかのように思えた。これ以後にあえて地域博物館という用語を使う場合には、この伊藤の議論を背景として行われているといってもよいであろう。

#### 4) 地域づくりと博物館

この伊藤の議論をより明確に発展させたのは、金山(1999, 2000, 2001)であろう。金山は地域博物館に求められることはまちづくりであるとして、その目的は「地域博物館がまちづくりの心を育てることを射程に入れることにする。その基本理念は次のとおりである。一つめは、地域をよく知り理解することである。二つめは自分がその地域に属しているという帰属意識、すなわち仲間意識としての社会的連帯感を持つことである。三つめは、地域の風俗・習慣などの生活・自然・景観などを守ることである。」(1999)といい、また「博物館法の精神は教育基本法に示されているように、「個」の確立をめざすものであり、地域博物館の理念も当然そこに求めることができる。」(2000)としている。

この議論は、伊藤の一連の議論に対して、地域博物館の活動目標を明確にし、さらに誰がそれになるのか、という利用者の側の立場を明記することでより現実的な博物館運営に結びつく議論となったと思われる。博物館とまちづくりとを結びつける議論は、エコミュージアムの議論や博物館をいわゆる観光資源と位置づける議論は行われていたが、地域博物館の本質論として、博物館の活動によって地域の利用者が変わり、その結果として地域が変わっていくという考え方は、地域博物館の新しい議論である。

特に金山の一連の議論は、博物館現場での企画展示や調査活動、資料収集の活動などと結びついて行われてきたために、現実的であり、かつ説得力のあるものとなっている。

これに結びついた議論として、最近の地域学(あるいは地元学)をあげることができるかもしれない。地域学の議論は全体として整理されていないようであるが、たとえば高橋信裕(2001)は、地域博物館の資料や情報発信の結果が、社会が共有する知の富として蓄積されており、こういう蓄積に触れた市民が、自分で地域の「楽しみの鉱脈」を探り当て、そ

の成果を地域に反映させていくことで、市民も博物館もともに成長発展し、さらにそのような成果や活動が共有化されることで社会性を獲得し、今日的な町おこし、地域の活発化にも結びついていくという。高橋は地域学を再定義した上で、「地域学がこれからの地域社会を経済的にも、また精神的にも支える重要な資産として論議され、位置づけられるなかで、地域の伝統文化の保存・継承をにない、また同時に新たな文化の創造・発信の中核機関として期待される地域博物館はこの地域学とどのように向かい合うべきであろうか」と問題提起をしながら、博物館の取り組み姿勢と運営についての提案も行っている。地域学と地域博物館の双方が目指すところは一致する部分とかなり異なる部分とがあるが、双方の視点をはっきり区別しながら、博物館として取り入れる部分を考えていくことが必要である。

### 5) その後の議論

これまで地域博物館に関する議論を見てきたが、これは結果としては現代的な博物館学について戦後の議論を時代を追ってみてきたことになる。そして当然のことながらそれらの議論は、過去の議論を発展させながら行われてきたものである。地域博物館は、対応するエリアの広さを意味する使用例から、利用者と博物館とのかかわりのあり方を示す用語として使用されるようになってきている。

しかしそうはいいいながら、後に述べるように伊藤の議論に対する批判的な議論も行われており、また、別の立場での議論もある。しかしその後の議論では地域という言葉に特に意味を持たせるような議論はされていない。

たとえば、川添（2001）は中央に対する地域主義の結果として地域にたくさんの博物館が作られたというような趣旨を述べており、また村上（1995）は、「地域博物館は、郷土博物館と読み変えてもさしつかえないであろう」と述べている。柘植（1999）は、地域博物館がいつでも誰にでも開かれた施設であるので、その利用者が地域の住民だけではなく、周辺地域の人々や遠隔地からの利用ということなどを述べている。

また一方で、伊藤のような地域博物館論に対して、地域博物館の持つ博物館としての機能をより重く見

て、改めて指摘する議論もある。たとえば小川（1986）は、地域博物館は地域研究によって、身の回りのものに息吹を与えて、展示や館活動に生かしていこうとするものであり、展示とともに、出版、各種講座、レファレンスなどによって地域情報を提供する場と考えるほうが適切、という考えを述べ、また一方で安室（1998）は、資料収集・展示・保存などのさまざまな面で「地域」は重要な意味を持つが、研究活動においてはその対象が「地域」に矮小化されるような議論が横行している、と問題点を指摘している。

博物館はすべての機能を十分に生かして活動してこそ、地域からも利用者からも活用されるということは議論の前提と考えられるが、そのことは常に意識しておくことは必要なのであろう。しかし、利用者の視点をもって博物館の運営をしていくということは、今後の博物館の運営においても、当然ながら博物館学の議論の中でも重要な課題となることは明らかであるため、地域博物館という用語を使う場合には、単なる場所という以上の意味を持つものとして扱いたい。

### 6) 地域にかかわる研究について

どういう用語を使うにしても、博物館がその設置されている「地域」を主な活動の範囲とし、また主な対象としているのが普通である。しかしその「地域」に対する捕らえ方が、変化してきていることは見てきたとおりであり、それは「地域」と「研究」との捉え方の変化に伴っているものである。

棚橋（1934）などがのべた郷土博物館の郷土とは、国語的には、「生まれ育った地、ふるさと、故郷」（新村出、1994）として使われてきた用語であるが、その郷土を研究の対象として位置づけたのは柳田国男（1931、1935など）である。柳田（1935）は郷土研究という言葉が、誰が決めたともなく20年余り前から使われるようになってきているが、人によって違った内容で使っているということを示唆して指摘しており、郷土研究とは「平民の過去を知ることであり、平民が自らを知ることである」（1931）としている。これによって郷土研究（郷土学）は民俗学の用語として使われるようになったが、一方で柳田の指摘と同じころに広まった、郷土への愛着や理解を重視して、郷土に具体的な教材を求める、という郷土教育とい

う考え方なども合わさって、厳密な定義がされないままで使用されるようになっていったようである。岸本（1956）の郷土博物館やその後の議論では、郷土の資料を使って、郷土の特色を調査研究する、ということ述べている。

博物館で明確に郷土学という用語を使用したのは、すでに述べたように、1976年の「秋田県立博物館基本構想」（加藤、1977）においてであるが、その後には、市町村の名前に学をつけた郷土学が各地で行われるようになっていく。

この郷土学に対して、ほとんど区別ができないような文脈で地域学という用語が使われるようになっていく。これは郷土という言葉の持つ戦前からの郷土愛護的なニュアンスを廃するとともに、「地域の個性化、アイデンティティの確立がこれまで以上に強く求められ」（高橋信裕、2001）ることに対して、地域や地域コミュニティの活性化につながるような、地域の資源、能力を発見・発掘しようという動きである。地域博物館という用語が使われるようになったのは、浜口・小島（1977）以後であり、伊藤寿郎が地域博物館という用語を使うのは1978年が最初である。地域に目を向けるという動きとあいまって、博物館内でも、地域住民と地域社会との関係に目を向けるようになってきたということである。

さらに近年になって、地元学という用語が使われるようになっていく。地元学とは、地域の資源や文化などの価値や意味を再発見するという地域学の要素とともに、「住民自身が当事者となって調べ、考え、ものや地域、生活を作っていくことを目指す」点が従来の郷土史や民俗学、地域学と異なる（甲斐良治、2001）とされている。

このような地域を見つめる目線の変化は、博物館の変化と並行するものである。地域の資源や人のネットワークのセンターは従来から地域の博物館であり、博物館側もそのことをより強く意識するようになってきているということであろう。

### 3 第三世代の博物館について

伊藤（1986）が地域博物館の議論を行うための前提として、第三世代の博物館という議論をおこない、その議論が日本の博物館の共通の目標像として博物館の現場で非常に大きな影響力を持ったことはすで

に述べた。この議論は地域博物館の理念にかかわる議論であるため、すこし詳しく見ておきたい。

竹内順一（1985）は博物館の運営方針によって博物館を区分して、一番古くさい第一世代、それを改革して現代に適應している第二世代、そして将来、改革を加えてつくりあげていく第三世代とした。伊藤はこの議論を引き継いで、第一世代を「国宝や天然記念物など、稀少価値をもった資料（宝物）の保存を運営の軸とする博物館」、第二世代を「資料の価値が多様化するとともに、その資料の公開を運営の軸とする博物館」、そして第三世代を「社会の要請にもとづいて、必要な資料を発見し、あるいはつくりあげていくもので、市民の参加・体験を運営の軸とする博物館」とした。そしてこの第三世代の博物館は期待概念であって、典型となる博物館はまだないが、部分的な事業においてはいくつかの博物館で、ワークショップの実施や市民との共同調査、展示室の開放などの事業において、新しい試みが蓄積されており、第三世代の博物館の個別の事業における実現例はあるとした。

さらに各世代の博物館像として、設置目的や職員、建物、および各事業などの到達段階を、いわばチェックリストの形で示した。この表が非常に具体的なものであったために、第三世代の博物館が博物館現場でも、理想とする博物館の目標像としてわかりやすいものとなったといえる。

そして博物館史や博物館の機能などと各世代との関係や利用者とのかわり方などからの分析の後、地域博物館の議論を行っている。地域博物館については、浜口・小島（1977）が示した地域型、観光型、中央型という博物館の区分が、従来の中央対地域という対抗だけではなく、「博物館の総体を対象化し、しかも相対化したうえで、そのあり方を示すひとつの概念として成立していく端初となった」として、地域志向型、中央志向形、観光志向型という博物館の型を示して、地域博物館の位置づけを行った。

伊藤の世代論はすでに述べたように、理想とする博物館像として博物館の現場に大きな影響を与えた。それは、日本の博物館が目指すべき方向や理想像についての議論が、それまでほとんどされてこなかったことによる。もちろん博物館の事業などについての目標設定はさまざまな形で議論されてきているが、

博物館そのものが目指すべき目標としての博物館の理想像についての議論はされてこなかった。そのため、現場で具体的な目標象としてわかりやすいこの議論が注目を集めたものと思われる。

しかし類似の議論がされていないために、第三世代の博物館についての議論が受け入れられてしまい、その内容についての検討がほとんど行われていないという現状がある。さらに博物館世代論と地域博物館論が表裏一体のものとして伊藤の議論がされたために、地域博物館についても博物館の理想像と受け取られてしまって、議論がされてこなかったように思われる。しかしながら、伊藤の議論は1980年代の議論であり、現在ではすでに博物館の現状自体が変わってきている部分もあるために、世代論自体を見直すことが必要になってきているのではないだろうか。

この問題に対する検討例はそれほど多くはない。安室（1998）は、地域博物館に対して、研究対象が地域に矮小化される議論がある、という指摘をしているが、同時に伊藤の地域博物館論が、学芸員の調査研究活動の序列化につながるものなので修正されるべきと批判を行っている。あるいは菅根（1998）は、博物館の運営の軸は、あくまで地域資料の後世への伝達であるとした上で、たとえば美術館の数が増えた上に、その利用方法を知らない利用者が名品優品至上主義を求める傾向が強いことや、学芸員の専門性は資料の管理であることをもっと意識すべきであるという議論を行い、「市民参加型地域博物館」という考え方に疑問を投げかけている。

しかしこれらの批判については、すでに結論が出つつあるのではないだろうか。博物館においても美術館においても、もちろん参加する利用者の数はそれほど多いわけではないが、すでに参加型といえるような活動をしている博物館の数はずいぶんと増え、利用者の視点を重視する博物館活動ということは、ほぼ博物館内での共通認識になりつつあると考える。むしろそのような参加型の博物館を運営するためには、研究や資料整備を重視して行ない、新しい情報を常に発信していないと、十分な利用が行えず、参加しようと思う利用者にとっては本来の博物館としての機能を活用することができないことになる。そういう意味での博物館事業のあり方を考えなおすことが必要になってくる。

また博物館のもっとも大切な運営軸は資料の整備であるという考え方はもちろんありうるが、それは一般的な博物館像として求めるものではなく、それを目標に、あるいは理念とする博物館もありうる、ということではないだろうか。それは、個々の博物館が、自館の運営上の理念として個別に決めることであろう。

瀧端真理子（2002）は伊藤の第三世代の博物館に関しては、精緻化が必要としながらも、利用者が運営にまで参加するのは事実上は無理であること、また自主グループの独立が理想とは言い切れない、とした上で、「市民参加」というときの市民とは誰のことをいうのかを定義していないことがこの議論の最大の問題点であるとしている。参加という場合に、どの人が、事業や運営のどの部分に参加するのか、を明確にするのでなければ、博物館への参加の可能性についての議論を進めることができないということであろう。前半の議論については、以前にそれに関して論じたことがあるが（布谷知夫、1998、1999）、たとえばどのような状態を参加といい、どこに目標をおくのか、というような具体的な規定抜きに議論ができないように思われる。その意味では、市民の定義以前に伊藤の議論は、博物館のあり方を理論化することを目標として行われているため、事業内容についての具体的な議論は、伊藤の議論の枠内では行えない。

布谷（2001）は、琵琶湖博物館では「第三世代の博物館」を意識はしていたが、それを目標像として考えたことはなかったこと、そしておそらく琵琶湖博物館が理想とした博物館像と「第三世代の博物館」像とは違った方向を目指していた、と述べた。伊藤の議論は1980年代から90年代にかけての「市民の中の博物館」（1993）が始まった時代の議論であって、市民による博物館利用の形態も、現代ではさらに広がっていると考えられる。したがって「第三世代の博物館」の議論では「博物館に利用者を集め、その利用者が活動する場となろうとしていたことに対して、現在の琵琶湖博物館は、地域とそこで活動する人々を中心に考えながら、その人達の地域での活動を情報や資料提供のかたちで博物館が支援することを目指す」（布谷、2001）ことを新しい博物館像として考えている。それに対して脇田健一（2002）は、

伊藤の期待概念とは逆の方向をめざすと、従来の博物館の存在意義や機能が希薄になる代わりに、地域の主体化がおこり、地域の博物館化につながる、このときの地域と博物館のそれぞれはどうなっていくのか、と問題提起している。

伊藤の議論は、博物館が一定の市民権を得るようになって、利用者とのかかわりを考えることが始まった時代に、一歩先を見通した博物館像を確立しようとしたものである。それ以後に博物館自体が変化していく中で、伊藤がイメージした博物館像の議論もすでに達成できている部分とまだ課題である部分、あるいはすでに古くなった部分などを整理することで、根幹にある地域博物館論を検証することが必要になっているのであろう。

#### 4 博物館と地域とのかかわり

結局、地域博物館に関する議論は、博物館は地域でどのような役割を果たすのか、というところに戻ってくる。博物館の役割にはさまざまな側面があり、どれかひとつだけを選び出してその活動を行うということではない。しかし博物館と利用者とのかかわりをより優先して考えるなら、博物館の役割は、利用者である地域住民が、地域の自然やくらしなどに関心を持つように手助けをすることである。そしてすでに金山（2001）が実例を示して述べているように、この結果として地域での新しい動きが起こり、まちづくりに結びつくことであろう。

もちろん、博物館がまちづくりを指導するというのではなく、博物館は、地域の人々が自分が暮らしている町の歴史や自然に関心を持ち、自主的な活動をはじめることができるように働きかけ、必要な情報を発信し、あるいは溜まり場を確保し、また人と人をつなぎあわせるような活動を行うことになる。このような博物館の地域での活動は、従来は研究会や同好会を作り、その会と博物館とが結びついて活動を維持することが当面の目的のようにして行われてきた。しかし、そのような特別なアマチュアの人たちとのかかわりだけではなく、地域の人々とのより広いかかわりを考えるのであれば、普通の人々が参加できるような地域活動を求めることになり、結果として地域での自主的なグループ活動に結びつく。つまり博物館がまちづくりを行うのではなく、

博物館を利用し、かかわった人々による活動が、地域を支え、変えていくようなまちづくりに結びつくという結果が起こる、という形が理想なのではないだろうか。

金山（2001, 2002）は、野田市出身の山中直治という童謡作曲家の再発見を行い、その曲を展示会やコンサートなどで紹介する過程で、学校や老人ホームなどのコンサートが行われ、研究会や歌う会が生まれ、学校での副読本、CDや曲集が出版され、住民コンサートやグッズの商品化などもあって、山中直治という作曲家を通して、地域の活性化が起こるという例を紹介し、「文化は生まれたままではそのままになってしまう。それを育ててくれる担い手の人たちがいて、初めて文化というのは大きく花開く」（2002）と述べている。

この例のように、博物館は、その活動によって、地域全体を動かすような力を持っている。このような例はそれほど多いわけではないかもしれないが、論文などになって公表されていない地域での博物館の活動は全国各地にあるものと思う。金山が言う「文化の担い手」は、地域に関心を持った住民のことである。博物館の活動がきっかけになって、地域に関心を持つ人が増え、広がることで、地域が変わり、新しい文化が花開くということであろう。そして、このように自主的な地域活動を行う住民が増えるような活動を、金山（2000）は「個の確立」に結びつく活動と呼んでいるのであろう。

山崎仁朗（1999）は地域が単に場所を指すのではないことを次のように述べている。

地域は、外部から構造的に規定されるだけでは成立しない。そこで暮らす人々が、程度の差はあれ、当の地域に帰属感情をもち、そのうえで自分が住む地域を自らよくしていこうとする営みがあって、はじめて地域は成立する。もちろんこうしたアイデンティティ自体がつけられるものとしての性格を併せもつが、そのことを含めて地域は主体的な営みの場所でもあり、だからこそ、単なる空間的な広がりであることをこえて地域社会となる。

博物館はこのような地域にあって、そのアイデンティティを作るための機関としての働きを持っていると考えられる。

伊藤（1986）は地域博物館を論じて、第三世代の博物館であるかどうかをわかりやすく知るためのチェックリストを作成し、発表している。この内容は基本的には、「地域に生活する市民自身の自己学習能力を刺激し、育み自分で自分の学習を発展させていく力量の形成を測ることを課題としている」が、その内容はやはり博物館の場に「市民」を呼び込んで、利用してもらおう、ということになっている。つまり1980年代から90年代の博物館の普及活動が発展している例として、大阪市立自然史博物館、横須賀市立博物館などが例となっていたことでわかるように、学芸員とともに調査活動に参加する優秀なアマチュアの育成を考えていたのであって、地域の普通の人々が、従来の専門分野の知識を学ぶ人としてではなく、博物館とともに地域で活動をするということにはなっていなかった。現代の博物館は、特定のアマチュアの人々だけではなく、地域のすべての人々に対応することが求められている。この点が現代の地域博物館論の一番の変化であり、発展内容である。

ただ注意すべきことは、すでにこれまでの議論の部分でも少し触れたが、博物館が地域の活動とかわっていくためには、博物館の本来の機能がますます強化されていくことが必要とされるということである。基礎的な博物館の研究活動、利用しやすい資料整備と収集の活動、利用者との交流を行う活動、博物館からの情報発信である展示活動など、これらの博物館の機能を生かした活動がきちんと行われていなければ、地域の人々に対して影響力を与えるような博物館の活動は行えないのである。

博物館が多くの利用者からの利用をされるのは、博物館以外の図書館や公民館などの社会教育施設や、あるいは観察会やワークショップなどを行う類似の施設、さらに人気の高いテーマパークなどとは、まったく異なる目的で、区別して利用されていると考える。それは博物館が、上記のような特別な機能を持ち、その内容を情報発信して、多くの人々が自由に利用できるようにしてあることと、そういう利用をする際の案内人ともいべき研究者である学芸員がいて、対応しているということである。利用しやすい博物館があり、必要な情報が得られるから、人は博物館を利用し、自己学習をし、その結果として地域に目をむけて、地域を変える活動に参加するのである。

したがって、博物館が地域の人々との活動を強化することに対して、博物館本来の資料整備などの事業がおろそかになるという意見があるが、それは逆なのであろう。もちろん力をかける時間の配分などの問題は個別にあるが、少なくとも博物館事業ができていなければ、利用者が博物館を利用しない。仮に優秀なファシリテーターであるような学芸員が地域で活動の中心となって地域活動を進めるようなことがあるとしても、博物館の機能を使わないで行う学芸員個人の活動は博物館の事業とはいえない。

琵琶湖博物館の場合には、県立博物館であり、特定の地域と結びついた活動は十分ではない。しかし、活動の目的は明確に「自分がくらす地域に目を向ける」ということにおいている。たとえば地域に残っている昔からの水利用の痕跡を、その地域の人々が自分で調べるという「水環境カルテ」の調査では、県内各地での調査が行われた。その結果、これまでわかっていなかった全県的な水利用の変化がわかってきたが、同時に参加者からの博物館の事業への参加意識とともに、自分の地域をもっと知る必要がある、という気持ちが、調査のグループを作るとともに、地域によっては、水環境から地域の環境に視点を広げて調査を行うというような活動が始まり、また調査の参加者の中にも、他の調査に積極的に参加したり、先日滋賀県で行われた世界湖沼会議の中で積極的に事務局に加わってボランティアで参加したり、あるいは改めて勉強をするために大学院に入った主婦などと、さまざまな人がいる。

生物系の参加型調査においても、参加したことがきっかけになって、ほかの地域の活動に参加するようになったという人は多い。たとえば、タンポポ、カタツムリ、ヒガンバナ、アオマツムシなどの参加型調査を行ったが、単に生物を見つける調査ではなく、地域を見るように工夫し、また調査の結果を共有することができるようにすることで、調査への参加意識を強く持ち、他の生物や地域のくらしに関心を深めることができる。

あるいは、このようななかかわりを持った人々を組織化して、地域での活動を行うことを目指した自主活動組織である「はしかけ」などの活動も始まっており、いろいろな活動の場に参加した人は、関連した地域の活動などにも参加して、活動を行っている。

## 5 まとめ

地域博物館についての議論を行った。地域博物館については、戦後の博物館法の成立の時代に、博物館学が形作られたときから議論が始まっているが、伊藤の地域博物館論はその時代の先を見通した議論として日本の博物館学に対して大きな影響を与えた。しかしその後、さまざまなタイプの地域博物館が数多く作られ、博物館の現実のイメージも変わってくる中で、伊藤の博物館論では対応できないような博物館活動も生まれている。

しかし、地域という言葉に場所という以上の特別の意味を持たせて、利用者 と博物館 とのかかわりのあり方を考えるという伊藤の議論は、基本的には共通の認識となっていると考えられる。この議論をさらに発展させるためには、まず伊藤のいう地域博物館を実現することをひとつの目標としてあげ、さらに博物館ごとにその発展形態としての博物館像を考えることが必要なのではないだろうか。

現在の博物館は多様化しており、さまざまな理念を持った博物館が成立している。しかし博物館事業の一部だけに特化する博物館でないのであれば、地域の利用者 とどのようにかかわることを目標とするのか、ということ、博物館の大きな課題である。そして利用者の視点に立った博物館は、博物館の利用者が地域に目を向けて、住みよい地域に変えるための活動に参加していくような活動を、結果としてバックアップできるような機関であることが求められるようになると思われる。

なお、文献について追手門大学、瀧端真理子氏からご教示を受けた。御礼を申し上げたい。

### 引用文献

- 千地万造 1964 新しい地方博物館—特に自然科学博物館の立場 大阪市立自然科学博物館館報(1) 2-4  
富士川金二 1971 増補改定博物館学 成文社 279pp  
浜口哲一・小島弘義 1977 地域博物館における学芸員と特別展 博物館学雑誌 2 (1・2) 1-14  
日浦勇 1968 研究と展示 大阪市立自然科学博物館館報(2) 1-4  
伊藤寿朗 1974 市民の学習権を保障する博物館活

### 動 現代社会教育実践の創造 民衆社

- 伊藤寿朗 1978 日本博物館発達史 博物館概論 (伊藤寿朗・森田恒之 編著) 学苑社 82-218  
伊藤寿朗 1986 地域博物館論 現代博物館の課題と展望 現代社会教育の課題と展望 (長浜功・編) 赤石書店 233-296  
伊藤寿朗 1991 ひらけ、博物館 岩波ブックレット No.188 62pp  
伊藤寿朗 1993 市民の仲の博物館 吉川弘文堂 190pp  
甲斐良治 2001 発言席 毎日新聞7月2日  
金山喜昭 1999 「まちづくり」と市民意識の形成に関する地域博物館の可能性 博物館学雑誌 24-2 37-50  
金山喜昭 2000 地方分権社会における地域博物館の現状と課題 ミュゼ39) 20-23  
金山喜昭 2001 日本の博物館史 慶友社 424pp  
金山喜昭 2002 市民と博物館・学校・行政の連携による新しい地方文化づくり 千葉県野田市における童謡作曲家山中直治の復活の軌跡 博物館学雑誌 27-1 25-36  
加藤有次 1977 博物館学序論 雄山閣 253pp  
川添登 2001 地域博物館とは何か 地域博物館への提言 (川添登・編) ぎょうせい 3-13  
岸本喜代治 1956 郷土博物館における教育活動 博物館学入門 (日本博物館協会・編) 理想社 125-131  
倉田公裕 1979 博物館学 東京堂出版 280pp  
小島弘義 1976 地方博物館の建設プランニング—その実際的アドバイス 博物館学雑誌 1-2 20-35  
村上義彦 1995 新しい地域博物館活動 雄山閣 155pp  
新村出 (編) 1994 広辞苑 (第四版)  
布谷知夫 1998 参加型博物館に関する考察—琵琶湖博物館を材料として 博物館学雑誌 23-2 15-24  
布谷知夫 1999 博物館の場で行われるボランティアの位置づけ 博物館学雑誌 24-2 19-28  
布谷知夫 2001 博物館の評価からの展開 施策としての博物館の実践的評価 (村山皓・編) 雄山閣 153-159

- 
- 小川直之 1986 情報センターとしての地域博物館  
民具マンスリー 19(5) 再掲(民俗社会と博物館  
雄山閣 174-178)
- 菅根幸裕 1998 学芸員の専門性についての一考察  
地域博物館論の再考 Museumちば 千葉県博  
物館協会(29) 11-16
- 高橋信裕 2001 地域博物館における地域学の課題  
と展望 文環研レポート(17) 1-6
- 竹内順一 1985 第三世代の博物館 冬晴春華論(3)  
73-88
- 瀧端真理子 2002 大阪市立自然史博物館における  
市民参加の歴史的検討(1) 大阪市立自然科学博  
物館時代 博物館學雑誌 27-2 1-17
- 田辺悟 1985 現代博物館論 暁印書館 223pp
- 棚橋源太郎 1934 郷土博物館 刀近書院
- 柘植信行 1999 地域博物館としての博物館 博物  
館概論(鈴木真理・編) 樹村房 120-141
- 脇田健一 2002 地域の集合的記憶—日本 文化遺  
産の社会学(荻野昌弘・編) 新曜社 183-212
- 山崎仁朗 1999 地域作りと住民自治 地域学への  
招待(松田之利・西村貢・編) 世界思想社  
80-95
- 柳田国男 1931 郷土研究の将来 郷土科学講座第  
一冊(再掲 定本柳田国男集第二十五卷 1977)
- 柳田国男 1035 郷土生活の研究法 刀江書院(再  
掲 定本柳田国男集第二十五卷 1977)
- 安室知 1998 民俗研究の場としての博物館 民俗  
社会と博物館 雄山閣 166-173